

Title	「せっかく」と「どうせ」：心態詞schonの一用法
Sub Title	Zum Gebrauch der Partikel schon in der Wendung „wenn schon" im Vergleich mit der japanischen Partikel dose
Author	岩崎, 英二郎(Iwasaki, Eijiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2008
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.25 (2008. 3) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別寄稿
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20080331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「せっかく」と「どうせ」

— 心懸詞 schon の一用法 —

岩崎英二郎

- I はじめに
- II 「せっかく」「どうせ」と schon
- III 両者の共通点 (1)
- IV 両者の共通点 (2) — 「どうせなら」と wenn schon —
- V 両者の違い
- VI おわりに

I はじめに

このところ国語学者渡辺実氏の『さすが！日本語』という文庫本を座右に置いてときどき目を通して¹⁾いる。この本のなかで同氏は「せっかく」「どうせ」「いっそ」「せめて」「さすが」など、日本語独特の言葉（これらの語類を日本語の専門家たちは〈副用語〉と呼んでいるようであるが、名詞、動詞、形容詞など独立して用いられる〈自用語〉に副う形で用いられるものという意味で、いわゆる副詞を中心に、それに接続詞、感動詞、連体詞を加えたものに相当する）を一般の素人にも判りやすく解説しておられるが、氏のパリやプリンストンでの滞在経験に基づいてフランス語や英語との違いを意識しながら論を進めておられるだけに、これらの副用語とはどこか似通ったところのあるドイツ語の副詞や心懸詞の研究に長年携わ

1) 本書の存在を私は長年の同学の友人岸谷徹子さんから教えられた。ここに記して心からの謝意を表す。ちなみに渡辺実氏とは、もう何十年も前のことだが、岸谷さんをも交えた研究会で何度か同席したことがある。

ってきた私には、この「どうせ」の用法はドイツ語の *eben* でも表現できるのではなからうか、この「せめて」の使い方は *wenigstens* とほぼ同じではないだろうかなど、日本語とドイツ語の細かなニュアンスの違いについてあれこれ考えるきっかけを与えてくれるし、ときには思いがけない発見をすることもある。その一つが、日本人ならば誰もがよく使うあの「せっかく」や「どうせ」とドイツ語の心態詞 *schon* とのあいだにある種の類似性が認められるという、これまで考えもしなかったまことに意外な事実であった。渡辺氏が「せっかく」を説明するさいに最初に取り上げられた文例

(1) せっかくパリまで来たのに、ルーヴルを見ずに帰るなんて残念だ。

を見て、自分が蒐集した心態詞 *schon* の多数の具体例の一つにたしかこれによく似たものがあったような気がしたのがそもそもの始まりだった。とはいっても心態詞としての *schon* には実にさまざまな用法があるし、「せっかくパリまで来たのに」からの連想でそのような使い方の *schon* の例を探すといっても、出典の著者すら判らないのではそう簡単には見つかるはずもなく、ただやみくもに検索するしかなかったが、しかしうれしいことに私の記憶はやはり間違っただけではなかった。ようやく探し出したのが次に示す文例 (2) である。

(2) Natürlich „muß“ man, *wenn man schon in Paris ist*, den Louvre, Notre-Dame, die Tuileries, das Grabmal des Unbekannten Soldaten und das Panthéon gesehen haben, man muß in Versailles und Chartres gewesen sein, [...]

(Hans Sahl, *Memoiren eines Moralisten*, 7. Kapitel)

もちろんせっかくパリまで来たからには、ルーヴル、ノートルダム、テュイルリー公園、無名戦士の墓、そしてパンテオンは「ぜひとも」見ておかなければならないし、ヴェルサイユとシャルトルへも行かなければならない [...]

(ハンス・ザール、あるモラリストの回想録、第7章)

II 「せっかく」「どうせ」と schon

上の訳文で schon を「せっかく」と訳したのは渡辺氏の例文との類似性を強調するために私が意図的にしただけのことで、「どうせパリまで来ているのだから」と訳してもむろんかまわないし、「せっかく」や「どうせ」などの副用語を使わずに。さらりと「パリまで来たからには」と訳すことも可能である。原文の意味、原作者の意図を正しく汲み取ったうえでそれをどのような日本語で表現するのか、それが訳者の腕の見せどころというものだろう。

ここで視点を変えて、われわれ日本人が「パリまで来たからには」と言うであろう場面で、ドイツ語を母語にする者ならばどのような表現を使うだろうかについて考えてみたい。例文(2)では不定代名詞 man を用いて主語を特定化することを避けているが、場合によっては

(3) Wenn wir schon in Paris sind, müssen wir den Louvre gesehen haben.

どうせパリまで来たのだから、ルーヴルを見とかなくちゃね。

のように主語を特定化することももちろん可能である（ただし日本語では主語をわざわざ口に出すことはめったにないから、上の訳文では「われわれ」とか「わたしたち」などはあえて使わなかった）。

(4) Wenn wir schon einmal / schon mal in Paris sind, müssen wir den Louvre gesehen haben.

(5) Wenn wir nun einmal / nun mal in Paris sind, müssen wir den Louvre gesehen haben.

例文の(4)と(5)は「せっかく」や「どうせ」をドイツ語ではほかにどのように表現すればよいかについて試行錯誤を承知の上で作ってみたのだが、いずれの例文にも einmal が使われていることに注目していただきたい。もともと「一回」や「一度」を意味する einmal には、英語の once やフラ

ンス語の *une fois* と同じように、「いったん…したからには」という、いまさら変えることのできない既成の事実や既成の判断などを示す働きがある。Wenn man *einmal* angefangen hat, das Buch zu lesen, kann man es gar nicht mehr aus der Hand legen. (いったんこの本を読み始めたら、もうやめられなくなってしまう) とか Wenn er *einmal* versprochen hat zu kommen, dann kommt er, selbst wenn er krank ist. (彼がいったん来ると約束した以上、たとえ病気になってもかならず来る) のような用法である。(4) は (3) に示した *schon* と *einmal* の併用だから、それ以上の説明は不要だと思うが、(5) の *nun einmal* ないし *nun mal* (*nun einmal* の口語形) についてのみ注釈を加えておこう。これは〈既成の事実〉〈既成の判断〉などに関して、それをいまさら変えることはできないという、話し手の諦めに似た、場合によっては多少ふてくされた気持ちすらも聞き手に伝えるシグナルとして働き得る心態詞的な表現であって、Ich bin *nun mal* ein fauler Mensch. (どうせおれなんて怠け者さ) のように用いられる。文学作品の中からの具体例を引用しておこう。

(6) MARTHE. Und Ihr, mein Herr, Ihr reist so immer fort?

MEPHISTOPHELES. Ach, daß *Gewerb und Pflicht* uns dazu treiben!

Mit wieviel Schmerz verläßt man manchen Ort,

Und darf doch *nun einmal* nicht bleiben.

(Johann Wolfgang von Goethe, Faust in ursprünglicher Gestalt, Garten)

マルテ. それで、あなたはそうやっていつも旅ばかり?

メフィストフェレス. ええ、商売と義務とに追い立てられてましてね。

立ち去るのがとても辛い土地もありますが、

でも腰を落ち着けるわけにはいきませんからね。

(ゲーテ、ウルファウスト、庭)

腰を落ち着けたい土地があっても、それも所詮は叶わぬ夢との諦めの気持が *nun einmal* によって表現されている。

(7) Das Lesen war ihm *nun einmal* so zum Bedürfnis geworden, wie es den

Morgenländern das Opium sein mag, wodurch sie ihre Sinne in eine angenehme Betäubung bringen. Wenn es ihm an einem Buche fehlte, so hätte er seinen Rock gegen den Kittel eines Bettlers vertauscht, um nur eins zu bekommen. [...]

(Karl Philipp Moritz, Anton Reiser. Ein psychischer Roman, 3. Teil)

読書は彼にはもう欠かせないものになっていた。東洋人たちにとって彼らの感覚を心地よく麻痺させてくれる阿片がたぶんそうであったように。もしも書物がなければ、それを手に入れるためには乞食にすらなったことだろう。

(カルル・フィリップ・モーリッツ、アントン・ライザー、

心理小説、第3部)

読書なしにはどうにも生きてはいけない、その変えようもない現実を示すのが *nun einmal* である。

ではこのへんで本題の *schon* に話を戻そう。まず確認しておきたいのは、文例 (2) の *schon* は心態詞であって「すでに」を意味する〈時の副詞〉(Temporaladverb) ではない (あるいは〈時の副詞〉ではもはやない) ことである。「すでにパリに來ている以上」とも訳せるではないか、というごく自然な反論があり得ることは承知しているし、もともとは〈時の副詞〉*schon* の「すでに」という具体的な意味がしだいに稀薄化していった結果が心態詞 *schon* であることはまぎれもない事実であるから、上例の *wenn man schon in Paris ist* の *schon* からは「すでに」の意味が「すでに」完全に消滅しているのかと開き直って詰問されたら、それを否定することはできないし、また否定すべきことでもないだろう。それが生きた言葉というものである。「すでに」という実質をいくらか保有しながらも、日本語を引き合いに出せば「せっかく」「どうせ」あるいは「どっちみち」等々の含みをこの *schon* が心態詞としてすでにもっていることを理解するだけの語感をぜひ身につけてほしいと思う。本来の時の意味がすでに薄れつつあることを知るためには、次の例文のほうが適当かもしれない。

(8) Wenn du *schon* einkaufen gehst, möchte ich dich bitten, mir Zigaretten zu

holen.

(9) どうせ買い物に出かけるのなら、タバコを買ってきてくれないか。

例文(8)のドイツ語と例文(9)の日本語を先入観なしに虚心に読み比べてみれば、両者がほぼ同じ内容を持ち、話し手のほぼ同じ気持ちを表現していることが読み取れるはずである。そして例文(2)の schon が心態詞であることにはいささか首を傾げざるを得なかった人たちも、例文(8)の schon がもはや〈時の副詞〉ではなくなっていることには納得できるのではないだろうか。

ただし(9)の「どうせ買い物に出かけるのなら、タバコを買ってきてくれないか」をドイツ語ではどのように表現するのだろうかと問われた場合、(8)が唯一の正解であるはずもなく、

(10) Wenn du *sowieso* einkaufen gehst, möchte ich dich bitten, mir Zigaretten zu holen.

のように表現することもむろん可能である。この例文を日本語に訳せと言われれば、即座に「どっちみち買い物に出かけるのなら、タバコを買ってきてくれないか」と答える人が大部分だろう。sowieso にはどの独和辞典にもかならず「どっちみち」の訳語が載っているからである。しかしこれでは直訳調の日本語にすぎず、「どうせ買い物に出かけるのなら」のほうかはるかに自然な生きた日本語だろうし、場合によっては「せっかく買い物に出かけるのなら」という人だっけきといるにちがいない。

(11) „Du bist alt geworden inzwischen, Siegfried. Sag mir wenigstens ‚Guten Tag‘, wenn ich dich schon besuche. Niemand kennt mich hier wieder, scheint’s...“

Besuch ist gut, dachte Stroberg. Er war immerhin ein wenig erleichtert. Er mußte dafür sorgen, daß Prinz’ Besuch ein sehr knapp bemessener Besuch blieb.

(Peter Jokostra, Herzinfarkt, 2.Kapitel)

「おまえも年を取ったな、ズィークフリート。おれが訪ねてきたときぐらいせめてこんちはぐらいは言えよ。おれのこと覚えているやつがここには一人もいないようだな、どうやら…」

訪問とは驚いたな、とシュトロークベルクは思った。それでも彼はいささかほっとしていた。とにかくプリンツがこの訪問をなるべく早目に切り上げてくれるよう考えなければならなかった。

(ペーター・ヨコストラ、心筋梗塞、第2章)

上に挙げた例文 (2) (3) (8) (11) の *schon* が、いずれも従属接続詞 *wenn* に導入される条件文のなかで用いられていることに、すでに気がつかれたであろうか。事実この種の *schon* が使われるのは、*wenn* に始まる条件文にかざられているのである。

それでは次に、元来は〈時の副詞〉であった *schon* が、なぜこのような場合に用いられるようになったか、このことについて考えてみたい。文例 (11) の *wenn ich dich schon besuche* では「おれがおまえを訪問している」という事実が「すでに」そこにあるのだし、文例 (2) の *wenn man schon in Paris ist* では「パリにきている」という事実がやはり「すでに」存在している。そのように元来は「すでに」という〈時の副詞〉であった *schon* が、時が経過するにつれてしだいにその本来の意味を失い、すでに確定してしまった既成の事実や状況に直面したさいの話し手のさまざまな心理状態を示す単なるシグナルへとしだいに変貌していったのではないだろうか。それぞれの場面に応じて、淡々とした心境、あきらめに似た気持ち、達観の境地、ふてくされた開き直り、あるいはその逆の自負、思い上がり等々、実にさまざまな心理の綾をそのつど聞き手に伝えるシグナルの役目を果たす心態詞へと少しずつ変容していったのではないだろうか。以上がとりあえずの私の推測である。

III 両者の共通点 (1)

これまでいろいろな例文を検討する過程で、ドイツ語では *schon*、*schon einmal*、*nun einmal*、*sowieso*、日本語では「せっかく」「どうせ」「どっち

みち」などを例として用いたが、これらドイツ語の心態詞ないし副詞、日本語の副用語ないし副詞に共通するもの、それは要するに上にも挙げた〈既成の事実〉ないし〈既成の判断〉ということに尽きるのではないだろうか。本稿の冒頭で触れた『さすが！日本語』の中で渡辺氏は、「せっかく」の例として、「せっかくパリまで来たのに」のほかに、「せっかく雨がやんだのだから」「せっかくのお言葉ですが」「せっかくだから」などさまざまな具体例を使っておられるが、これらの発話がすべて特定の〈既成の事実〉を前提としてなされていることは言うまでもないだろう。

「どうせ」の場合も同断である。同書に見られる「どうせ」の例文を調べてみよう。「どうせわたしは馬鹿ですとも」は、たぶん相手がふだんから自分のことを馬鹿にしていることを念頭に置いての発話であろうし、「あなたが自分で頼みに行ったってどうせ断られるわよ」は、頼みに行く相手がきわめて手強い相手であるという話し手の〈既成の判断〉を前提しての発話にちがいない。「どうせ行くならビジネスクラスで楽に行きましょうよ」の場合には、航空機で旅をすることがすでに決まっているはずだし、「人はどうせ死ぬものだが」にいたっては、人間にとってそのものずばりの〈既成の事実〉である。

最後に「どっちみち」だが、この言葉は渡辺氏の上掲書では扱われていない。しかし「あの人に頼みに行ったってどっちみち断られるわよ」「きみだっぴいずれはどっちみち死ぬわけだし」などの例によっても明らかのように、「どっちみち」も〈既成の事実〉や〈既成の判断〉なしには考えられない表現であることは、改めて説明するまでもないだろう。

それでは話し手のどのような心理が *schon* によって相手に伝えられるのか、あるいは伝わるのか、いくつかの具体例を通じて検討してみよう。

- (12) [...] Als sie die Kälber sah, sagte sie, wenn ich *schon* dem Vater eines geben wolle, wie es im Vornehmen sei, so sollte ich ihm doch dieses geben. Sie hatte eines ausgesucht mit sehr schönem weißem Kopfe, mit weißer Fahne und dunkelbraunen Lenden. Sie gehen nicht häufig mit einer solchen Zeichnung in unsern Waldweiden herum. Ich sagte ihr, daß ich wohl selber

gedacht habe, dieses würde ich hinauf senden, und sobald der Stall im Hage oben im bewohnlichen Zustande wäre, so würde das Kalb geschickt werden und mit ihm ein anderes, das fast eben so aussähe, nur in dem Augenblicke nicht hier sei, damit ein Anfang gemacht würde zu schönen, glänzenden, zutulichen Rindern.

(Adalbert Stifter, Die Mappe meines Urgroßvaters, Margarita)

[...] マルガリータは仔牛たちを見て、もし、父にこの中の一頭を譲って下さるのでしたら、どうぞ、この仔牛にして下さい、と言った。彼女が選び出したのは、非常に美しい白い頭をして、尻尾が白く、腰の辺りが濃い褐色の仔牛だった。こんな特徴をした牛は、この辺りの森の牧場には、めったに見当たらなかった。私は彼女に、私もこの仔牛を差しあげようと思っていたこと、かしわ林の牧場の厩舎が使えるようになったら、この仔牛の他に、今はここに居ないけれど、この仔牛とほとんど同じ様子をしたもう一頭の仔牛も連れてゆくつもりです、そうすれば、輝くばかりに美しく、おとなしい牛を増やすこともできましょう、と語った。

(アーダルベルト・シュティフター、曾祖父の遺稿、

マルガリータ、玉置保巳訳)

wenn ich *schon* dem Vater eines geben wolle, wie es im Vornehmen sei を玉置氏は「父にこの中の一頭を譲ってくださるのでしたら」と的確に訳しておられるが、この *schon* には、「すでに」あなたがそのように考えておられるのならば、という〈時〉の意味が皆無とまでは言わないまでも、どちらかと言えはやはり「せっかくそのお気持ちがおありになるのであれば」「どうせ頂戴できるのなら」という日本語の表現に近い心態詞と考えるべきであろう。

(13) „[...] Wenn ihr schon die Zähne zeigt und die Fäuste ballt, so flüstert keine sanften Worte dazu – wenn ihr schon vor Ungeduld zittert, das Schwert zu schwingen, so macht doch nicht, als legtet ihr aus bloßer Vorsicht die Hand an den Knauf“...

(Bertha von Suttner, Die Waffen nieder!, 1.Band, 3.Buch)

「[...] あなたがたが齒を剥き出し、こぶしを固めていらっしゃるのに、甘い言葉など囁かないでいただきたいわ — 劍を振るいたくてうずうずしていらっしゃるのに、ただ用心のためだけに劍の柄頭に手をやっているふりなどなさらなければいいのよ」

(ベルタ・フォン・ズットナー、武器よさらば、第1巻、第3章)

ここに使われている二つの schon は、たとえば wenn man *schon* den Krieg anfangen will (どうせ戦争を始めるつもりならば) などの schon と同じ使い方で、齒がすでに剥き出されており、こぶしがすでに固められているというような、〈時の副詞〉の schon と混同してはならない。

(14) „Na also?“

“Wie meinst du?” fragte Nachtigall wie aus einem Traum.

„Erzähl’ doch weiter. Wenn du schon einmal angefangen hast... Geheime Veranstaltung? Geschlossene Gesellschaft? Geladene Gäste?“

„Ich weiß nicht. Neulich waren dreißig Menschen, das erstemal nur sechzehn.“

„Ein Ball?“

„Natürlich ein Ball.“ Er schien jetzt zu bereuen, daß er überhaupt gesprochen hatte.

(Arthur Schnitzler, Traumnovelle, 4.Kapitel)

「それで？」

「なんだって？」とナイチンゲール君は夢から覚めたように尋ねた。

「話を続けろよ。どうせ話し始めたんだ... 秘密集会だって？ 会員制だって？ 招待客だって？」

「知らないよ。この前は30人だったけど、最初のときは16人だけだった」

「ダンスパーティー？」

「むろんダンスパーティーさ」 彼は、話さなければよかった、と後悔し始めているようだった。

(アルトゥール・シュニツラー、夢物語、第4章)

ここでは schon ではなく schon einmal が使われているが、「どうせ話し始めたのだから」の訳語からも判るように、この種の schon の典型的な使い方である。

(15) [...] Wenn meine Furcht nicht so groß wäre, so würde ich mich damit trösten, daß es nicht unmöglich ist, alles anders zu sehen und doch zu leben. Aber ich fürchte mich, ich fürchte mich namenlos vor dieser Veränderung. Ich bin ja noch gar nicht in dieser Welt eingewöhnt gewesen, die mir gut scheint. Was soll ich in einer anderen? Ich würde so gerne unter den Bedeutungen bleiben, die mir lieb geworden sind, und wenn schon etwas sich verändern muß, so möchte ich doch wenigstens unter den Hunden leben dürfen, die eine verwandte Welt haben und dieselben Dinge.

(Rainer Maria Rilke, Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge)

この恐怖がそれほど大きなものでないのなら、僕は、いっさいが違ったふうに見える世界でも、生きつづけることは不可能ではないと、自分を慰めるところかもしれない。しかし僕は恐ろしくてたまらない。この変転を前にして、言葉を失うほど恐ろしいのだ。僕はこの世界に、このままでいいと思えるこの世界に、まるでまだ住み慣れていない。その僕がべつの世界に入ってどうなるというのか？僕は自分に好ましいものとなった、このもろもろの意味の世界に、なんとしても留まりたい。どうしても何かが変わらなければならないのなら、せめて犬たちの仲間まじって生きることを許されたい。彼らなら、われわれと血縁の世界を、同じ物たちを持っているのだから。

(ライナー・マリア・リルケ、マルテ・ラウリス・ブリッゲの手記、
杉浦博訳)

ここでは wenn schon etwas sich verändern muß のくだりが、「どうしても何かが変わらなければならないのなら」と淡々と、しかし正確に訳されているが、要するに「どうせならせめて犬たちの仲間として」ということであ

る。

(16) „Wir müssen es loszuwerden versuchen“, sagte die Schwester nun ausschließlich zum Vater, denn die Mutter hörte in ihrem Husten nichts, „es bringt euch noch beide um, ich sehe es kommen. *Wenn man schon so schwer arbeiten muß, wie wir alle*, kann man nicht noch zu Hause diese ewige Quälerei ertragen. Ich kann es auch nicht mehr.“ Und sie brach so heftig in Weinen aus, daß ihre Tränen auf das Gesicht der Mutter niederflossen, von dem sie sie mit mechanischen Handbewegungen wischte.

(Franz Kafka, Die Verwandlung, 3.Kapitel)

「あたしたち、これをなんとか厄介払いしなければいけないのよ」と妹は、今度は父親だけにむかって言った。母親のほうは咳き込んでいて何一つ聞こえなかったからだ。「このままだとお父さんもお母さんも二人とも死んでしまうわ、そうなるのが目に見えてるわ。あたしたちみんな、これまでだって働きどおしに働いてきたのに、おまけに家のなかで絶えずこんな責め苦を受けなければならないなんて。あたしだってもう我慢できないわ」。そう言って妹は激しく泣き崩れ、その涙が母親の顔に流れ落ちたが、母親は機械的に手を動かしてその涙を顔からぬぐい取った。

(フランツ・カフカ、変身、第3章)

ある朝目を覚ますといつのまにか甲虫に変身していたというグレーゴル・ザムザの物語はあまりにも有名だが、冒頭の „Wir müssen es loszuwerden versuchen“の es は、化け物のようなその虫 (原文では Untier) を指している。ところで問題の箇所 „Wenn man schon so schwer arbeiten muß, wie wir alle“は「あたしたちみんな、これまでだって働きどおしに働いてきたのに」と意識をしておいたが、この schon に「せっかく」や「どうせ」の訳語を当てることができない。この schon に近い日本語を強いて探すとすれば、さしづめ「ただでさえ…なのに」とでもいうところだろうか。ドイツ語では „Wenn man *ohnehin* so schwer arbeiten muß“ や „Wenn man *sowieso* so *schwer* arbeiten muß“あたりが無難な言い換えだろう。例文(9)

Wenn du *sowieso* einkaufen gehst, möchte ich dich bitten, mir Zigaretten zu holen. のことを思い出していただければ、これらの *schon* がすべて同類であることが納得できるはずである。

(17) Das Geld brauchte ich dringend, aber vorwiegend für Theaterkarten, nicht etwa für Bücher. Wer auswanderte, konnte nur wenig mitnehmen, die Bibliotheken blieben meist zurück. *Und wenn man schon ins Exil Bücher mitnahm*, dann nicht Romane oder Gedichtbände, sondern Fachliteratur und, vor allem, Wörterbücher. Was bleiben mußte, wurde verschenkt.

(Marcel Reich-Ranicki, Mein Leben,

1. Teil, Mehrere Liebesgeschichten auf einmal)

その金が私にはぜひとも必要だったが、それは芝居の切符を買うため、書物を購入するためなどではなかった。亡命する者はわずかの荷物しか持ち出せず、蔵書類は大部分置いてゆかざるを得なかった。そしてどうせ亡命先に書物をもってゆくのなら、それは小説や詩集ではなく、専門書と、そしてとりわけ辞書類だった。置いていかざるを得ない書物は他人にあげてしまった。

(マルセル・ライヒ＝ラニッキ、わが生涯、第1部、

いくつかの恋愛を同時に)

(18) [...] Kinder können einen ungeheuer anöden, aber malen können sie, daß man kaputt geht. *Wenn ich mir schon Bilder ansah*, dann bin ich lieber in einen Kindergarten gegangen als in ein olles Museum. Außerdem schmieren sie *sowieso* gern Wände voll.

(Ulrich Plenzdorf, Die neuen Leiden des jungen W.)

[...] 子供なんてものはひどく神経に障ることもあるけど、でも絵はぶったまげるほどうまいね。だからぼくは、どうせ絵を見に行くんだったら、くだらない美術館に行くよりむしろ幼稚園へ行ったね。それにあいつらはどっちみち壁じゅう絵で塗りつぶしちゃうしね。

(ウルリヒ・プレントドルフ、若きWのあらたな悩み)

(19) [...] Meine ambivalente Gefühle gegenüber solchen Autos findet Robert kleinmütig. *Wenn man schon im westlichen Sumpf lebt*, dann bitte mit allem Komfort, den man sich leisten kann. Die Klassengegensätze, die westdeutsche Intellektuelle etwa zwischen einem Golf-Cabrio und einem Jaguar entdecken, findet Robert zum Lachen und sieht sie – hier ganz orthodox – als Widersprüche im bürgerlichen Lager an. [...]

(Peter Schneider, *Der Mauerspringer*, 3.Kapitel)

このような車に対するほくのどっちつかずの感情をロベルトは臆病だと思っている。どうせ西の泥沼のなかで暮らす以上は、ぜひとも手に入るかぎりのあらゆる快適さを、というわけさ。西の知識階級のやつらがたとえばゴルフ・キャブリオとジャガーとのあいだに階級間の対立を見たりするのは、ロベルトにとってはとんだお笑いぐさで、彼はそれを—ここではオーソドックスに—ブルジョア陣営の矛盾と考えているんだ。

(ペーター・シュナイダー、壁を飛び越える男、第3章)

(17) から (19) までの引用文に用いられている *schon* については、いまさら解説するまでもないだろう。いずれも「どうせ」の訳語がぴったり当てはまるものばかりである。例文 (1) に始まる私のくどくどしい説明にここまで辛抱強く付き合ってくださいました方々は、これら三つの例文での *schon* の使い方などは、すでに楽々と理解されただろうし、合わせて「せっかく」「どうせ」と *schon* の共通点についても十二分に判っていただけのことと思う。

IV 両者の共通点 (2) — 「どうせなら」と *wenn schon* —

渡辺実氏は上記の書『さすが! 日本語』のなかで「せっかく」「どうせ」など副用語の〈自用語化〉についても述べておられる。渡辺氏は

(20) せっかくですが、御要望には添いかねます。

(21) せっかくだから、いただいて帰りましょうよ。

(22) どうせなら一戸建にしない？

などの例を挙げ、このように元来は副用語である「せっかく」「どうせ」が述語を省いて用いられる現象、言い換えれば、このように自用語が副用語に吸収された結果、副用語が自用語のように用いられる現象を〈副用語の自用語化〉と名付けておられるが、まことに興味深いことに、心態詞 *schon* にもたまたまそれに類似した現象が見られる。つまり渡辺氏の言葉を借りれば「*schon* が述語動詞を吸収」してしまう現象である。具体的に説明しよう。

(23a) *Wenn man schon einmal in Paris ist, muß man den Louvre gesehen haben.*

(23b) *Wenn schon einmal in Paris, muß man den Louvre gesehen haben.*

(23a) は「せっかくパリまできたからには」という例のすでにお馴染みの文例だが、(23b) の *Wenn schon einmal in Paris,...* のほうは主語と述語が省かれている。しかしそれでも何も支障はなく、それだけで意味は十分に通じる。前後の文脈 (Kontext) や、この発話のなされた具体的な場面 (Situation) が、省略された部分を十二分に補ってくれるからである。同じような例をいくつかお目にかけよう。

(24) *Wenn schon eine Schiffsreise, dann mit einem Luxussschiff.*

せっかく船で旅をするのなら、豪華客船に乗りたいたものだ。

もしもこの言葉が船会社の宣伝ポスターの謳い文句ならば、「せっかくの船旅、豪華客船でどうぞ」とでも訳すべきところだろう。ついでに *eine Schiffsreise* まで省いてしまって、

(25) *Wenn schon, dann mit einer Luxusjacht.*

どうせなら豪華ヨットで。

というのもキャッチコピーとしては大いに有効かもしれない。

(26) *Wenn schon in jungen Jahren sterben, dann möglichst ohne Schmerz.*

どうせ若死にするのなら、なるべく楽に死にたいね。

(27) *Wenn schon, dann möglichst ohne Schmerz.*

どうせなら、なるべく楽なほうがいいね。

文例 (27) の *wenn schon* は、*wenn schon in jungen Jahren sterben* の省略形とはもちろんかぎらない。文脈と場面を手がかりに聞き手がそのように理解するだけのことである。(25) (27) に見られる *wenn schon, dann ...* に始まる言い回しは、きわめて広く一般に用いられており、試しにネットで検索してみれば、無数の例が見つかる。そのいくつかを御紹介しよう。

(28) *Wenn schon, dann richtig! Halbherzigkeit wird sich nicht auszahlen.*

どうせやるなら本気でやろう。中途半端な仕事は報われない。

(29) *Wenn schon, dann richtig die Fetzen fliegen lassen!*

どうせやるなら徹底的に。

(30) *Wenn schon, dann lieber Chinesisch lernen.*

どうせなら中国語を学ぼう。

(31) *Wenn schon, dann ein Grüner Tee aus Japan.*

どうせ飲むなら日本製の緑茶を。

(32) *Wenn schon, dann lieber am Tag, in der Nacht wird geschlafen.*

せっかくなら昼間のほうがいい、夜は睡眠だ。

きりがないのでこれでやめにするが、この言い回しがいかに一般に普及しているかが、これでよくお判りいただけたことと思う。

最後にこの用法の典型例の一つともいえるべき *wenn schon, denn schon* に一言触れておく。いわゆる〈省略的成句〉(elliptische Redewendung)の一つであるが、この成句を独和辞典で引いてみると、「毒を食わば皿まで」という日本の諺が訳語に加えられていることが多い。本来の意味は「どうせやるなら徹底的に」「どうせならとことんまで」ということである。なお正書法 (Rechtschreibung) の本家本元として著名な Duden の『正書法辞典』(Die deutsche Rechtschreibung) は、この成句は *wennschon, dennschon* と表記するようにと指示しているが、よそ者の余計なお世話を承知の上で言わせてもらえば、*Wenn schon, dann richtig!* と *Wennschon, dennschon.* をいかなる理由で表記上区別しなければならないのか、理解に苦しむ。この成句の前半部である *wenn schon* は (28) から (32) までの *wenn schon* とまったく同じ用法であり、後半部の *denn schon* の *denn* は、*dann* の古形だからである。それなら *denn schon* のほうの *schon* は何かということになるが、この *schon* の用法は本題からはずれるので、ごく簡単な説明に留めておく。*denn schon* の *schon* は、次に示す例文 (33) (34) の *schon* とまったく同じ使い方である。

(33) Wenn ich sowieso arbeiten muß, werde ich *schon* gründlich arbeiten.

どのみち働かねばならぬ以上は、徹底的に働くつもりだ。

(34) Um Deutsch wirklich gut zu beherrschen, muß man *schon* in Deutschland gelebt haben.

ドイツ語をほんとうにマスターするためには、ドイツでの生活が不可欠だ。

この二つの例文を何度も熟読玩味してみれば、ここに使われている *schon* のニュアンスはおのずから会得できるのではないだろうか。*denn schon* の *schon* もまさにこの *schon* である。ただし *wenn schon, denn schon* が初めから〈省略的成句〉であったわけではない。そのことは、次の引用例を見れ

ば明らかである。

(35) [...]Unter vielen Achs und Ohs und Seufzern erzählte sie ihre traurige Fabel... Der Mann tot... sie mittellos... ach, sie trennt sich so schwer von den lieben Sachen, die Zeugen ihres Glückes, *aber wenn schon, denn schon rasch*, und wenn sie nur in gute Hände kommen...[...]

(Mieze Biedenbach, Erinnerungen einer Kellnerin)

[...] 何度も何度もああと言ったり、おおと言ったり、溜息をついたりしながら、彼女は悲しげな作り話を物語った。夫は死んでしまったし... 財産なんかないし、ああ、仕合わせだったころの証人ともいえるこれらの大切な品物と別れるのはほんとうに辛いわ、でもどうせ売らなければならないものなら、いっそいましてすぐ売ってしまいたい、それにいい人を買ってもらえさえすれば... [...]

(ミーツェ・ビーデンバッハ、ある給仕女の思い出話)

ビーデンバッハのこの作品については、それが1906年に出版された彼女の自伝であることだけは判っているが、彼女自身に関しては、残念ながらいまのところ何も知ることができない。しかしこの自伝の刊行が1906年であることから考えれば、彼女が活躍したのはたぶん19世紀の後半のことだと思われる。したがって例文(35)は、*wenn schon, denn schon*が少なくともその頃まではまだ単なる〈省略的成句〉にはなりきっていなかったことを示す数少ない貴重な資料の一つと言えるのではないだろうか。

最後に〈省略的成句〉としての *wenn schon, denn schon* が具体的にはどのように用いられているのか、現代文学作品からその実例を一つだけ挙げておこう。

(36) Ich bog auf die Autobahn ein und trat aufs Gas. Mein Brautkleid lag in einer lackroten Schachtel auf dem Rücksitz. Modell *Opera*, fünf Meter weißer Tüll für den Rock, eine weich drapierte und mit einzelnen Perlen bestickte Corsage aus Satin, lange weiße Handschuhe und sogar ein Schleier mit winzigen, Maiglöckchen nachempfundenen Blüten. Ausgerechnet ich mit

einem Schleier! *Aber wenn schon, denn schon.*

(Doris Dörrie, Die Braut)

私は^{アウトバーン}高速道路めざしてカーブを切り、アクセルを踏んだ。深紅のボール箱に収めた花嫁衣裳がバックシートに載せてあった。「オペラ」と銘打たれた特注デザインだ。スカート部分の白チュールが五メートルもあり、サテンの^{ボディース}胴部は柔らかくひだをつけたうえ、刺繍で真珠がちりばめてある。それに長い白手袋と、スズランのような小花をあしらったヴェールがセットになっていた。——この私がヴェールをかぶるとはね！ でも、どうせ乗りかかった船、やるしかない。

(ドーリス・デリエ、花嫁、西川賢一訳)

Aber wenn schon, denn schon. を「でも、どうせ乗りかかった船、やるしかない」と訳された西川氏の腕前はなかなかのもので、まさに適訳だと思う。

V 「せっかく」「どうせ」と schon の違い

ここまでは、日本語の副用語「せっかく」「どうせ」とドイツ語の心態詞 *schon* とを比較しながら、どちらかといえば両者の共通点を指摘することに重点を置いて筆を進めてきた。冒頭にも述べたように、両者が類似の場面、類似の文脈で用いられるという意外な発見への驚きがそもそも本稿執筆の動機となったからである。それでは両者の違いはどこにあるのだろうか。これについてはいまのところあれこれ思案を重ねている段階で、結論めいたものはまだ出せないのだが、いま考えているのは次のようなことである。

「せっかく」や「どうせ」は、「うれしい」「かなしい」「もったいない」「とんでもない」のような自用語としての形容詞に比べれば具体性にははるかに乏しいが、そのときどきの話し手の主観に関する情報がある程度相手に伝え得るだけの意味内容を、語の段階ですでに備えているのではなからうか。ところが *schon* 自身のもつ意味内容といえ、この心態詞がかつて〈時の副詞〉であった段階でもっていた「すでに」という時間的な客観情報がその主なもので、この *schon* を用いる話し手の心理状態に関する情

報は、たとえば本稿で扱っている *schon* が *wenn* 構文 (*wenn-Satz*) のなかでのみ一定の働きをするように、特定の構文と相俟って初めて生まれてくるものと思われる。具体例に即して考えてみよう。

(37) Wenn wir *schon* hier sind, müssen wir unbedingt den Louvre besuchen.

せっかくここまで来たのだから、ぜひともルーヴルへは行かなくちゃね。

(38) Wenn wir *schon* hier sind, könnten wir eventuell den Louvre besuchen.

どうせここまで来たのだから、ルーヴルへ行くのもいいかもね。

まずドイツ語の原文のほうだが、前半部の *wenn wir schon hier sind* は (37) と (38) に共通である。いずれの場合も *wenn* 構文に *schon* が登場することによって初めて、話し手がパリに来たからには何かをしたいと思っているらしいとのシグナルが、*schon* を媒介として聞き手に伝わるのである。ところがもしもこの構文がこのように接続詞 *wenn* に始まる条件文ではなく、ふつうの平叙文であったらどうだろうか。

(37a) Wir sind *schon* hier, wir müssen unbedingt den Louvre besuchen.

(38a) Wir sind *schon* hier, wir könnten eventuell den Louvre besuchen.

この二つの文がドイツ語として立派に通用するものであることは言うまでもない。しかし問題はその前半部である。*wir sind schon hier* だけを耳にした聞き手には、われわれがすでにここに来ている、という客観的な事実は伝わるが、「パリまで来たのだから何かをしたい」という相手の気持ちまでは伝わりにくい。実際の状況では、ここまで聞いて敏感に相手の気持ちを察知する旅仲間もいるにはちがいないが、この構文ではそれが聞き手には伝わりにくいのである。別の言い方をすれば、*Wir sind schon hier.* の *schon* は「すでに」を意味する〈時の副詞〉と解釈すべきであって、心態詞であるとの解釈は成立しないのである。

それでは日本語のほうはどうだろうか。まず例文 (37) だが、「せっかくここまで来たのだから」という前半部を耳にするだけですでに聞き手は、話し手がパリ滞在をむだには過ごしたくはないのだな、何もしないのはもったいないと思っているのだな、ということを感じ取ることができるし、そのシグナルの働きをするのがまさに「せっかく」である。(38)の「どうせ」についても同様で、「どうせここまで来たのだから」と言われたときの聞き手には、「せっかく」の場合ほどの強い意欲は感じられないものの、それでも話し手が何かをしたがっていることだけは十分に伝わるはずである。つまり「せっかく」にせよ「どうせ」にせよ、schonのように構文の助けを借りることなく、ある種の情報を相手に伝え得るだけの意味内容を語の段階ですでもっているのであって、ここが schon とのいちばん大きな違いなのではないか、そのように私には思われるのである。

これは「せっかく」「どうせ」にかぎることではなく、「まさか」「せめて」「いっそ」「さすが」など一連の副用語²⁾についても言えることだと思う。たとえば死んだと思っていた友人が突然目の前に現れたとする。日本人ならばまさに「まさか」というべき場面であろう³⁾。「まさかきみが生きているなんて」「こんなことがまさかあろうとは」など発話全部を耳にしなくても、「まさか」の一言を聞いただけで、その場に居合わせる人々には、話し手がその友人の出現をあり得ないこと、信じられないことと考え、心の底から驚いていることが判るのである。しかしドイツ語の心態詞ではそうはいかない。Das ist *doch* nicht wahr! / Das ist *ja* unglaublich! / Das gibt es *doch* nicht! など、そのような場面では *doch* や *ja* が好んで用いられるし、場合によっては、驚きのあまり Das ist *doch*... まで言って絶句してしまうこともあるだろうが (Das ist *ja*... についても同様)、このような構文とは無関係な単独の *Doch!*、単独の *Ja!* だけでは、相手には何も伝わらないし、事実、先行する発話に含まれた否定を打ち消す *Doch!* や、先行する問いへの肯定

2) 同じ副用語でも「さっき」のように時間に関わるもの、「ずいぶん」のように程度に関わるものなどは、もちろん別である。

3) 「まさかのとき」「まさかに備える」のような使い方はここでは問題にしない。

を意味する Ja! は別として、心態詞の doch と ja にはそのような単独用法は存在しない。

上の文例 (37) の訳文に「せっかく」を使い、(38) の訳文に「どうせ」を用いたのは、説明の都合上意図的にそうしただけのことで、この訳文がこの場面にもっともふさわしいというわけではない。(37) を「どうせここまで来たのだから、ぜひともルーヴルへは行かなくちゃね」と訳しても少しもかまわないし、(38) は「せっかくここまで来たのだから、ルーヴルへ行くのもいいかもね」と訳すほうがむしろ自然だと考える人もきっといるに違いない。また「もったいない」のようなあまりにも日本人的な気持ちの籠もった「せっかく」などは使わないほうが無難だと考える人もあるいはいるかもしれない。しかしドイツ人も「もったいない⁴⁾」の気持ちとは無縁の人たちではあり得ないし、前後関係の文脈ないし場面によっては「せっかく」の訳語がまさにぴったりの場合もあるに違いない。それだけのことだと思う。

schon に限らず、総じてドイツ語の心態詞は、それが用いられる構文の違いによってそれが果たす役割もそれぞれ異なるのがふつうであり、それが日本語の副用語との大きな違いだと思うが、そのことを判っていただくために、同じ schon が、構文の違いによってどのような異なるシグナルを与え得るかを、その代表例ともいべき次の二つの用法にかぎって説明したいと思う⁵⁾。

まず schon がふつうの平叙文に用いられる場合である。Sei ohne Sorge! Es geht schon gut. (心配するな。うまくいくさ)、Wenn es soweit ist, werde ich Ihnen schon Bescheid sagen. (そのときになったら、ちゃんとお知らせしますから) のような使い方である。この種の schon には、独和辞典では「きっと」「かならず」「たしかに」などの訳語がつけられていることが多いが、gewiß, sicher (英語の certainly, surely、フランス語の certainement,

4) 「もったいない」という日本語が最近脚光を浴びているが、それはあくまで語彙としてのことであり、このような気持は日本人だけがもっているということではもちろんない。

5) 心態詞 schon には、これ以外にもまだまだ多くの用法がある。

sûrement) のように実質的な意味をもつ〈話法詞〉(Modalwort) ではないのだから、訳語をつけることは厳に慎むべきであろう。平叙文に使われるこの schon は、陳述内容がかならずや実現するであろうとの話し手の確信、自信、自負などの気持を聞き手に伝えるシグナルの働きをするだけのもので、「きっと」「かならず」などの語彙的な意味はまったくもたないからである。

(39) MOOR: Geh voraus und melde mich. Du weißt doch noch alles, was du sprechen muß?

KOSINSKY: Ihr seid der Graf von Brand, kommt aus Mecklenburg, ich Euer Reutknecht – sorgt nicht, *ich will meine Rolle schon spielen*, lebt wohl! (Ab.)

(Friedrich von Schiller, Die Räuber, 4.Akt, 1.Szene)

モール 先に行って案内を通じてくれ。言ふ事を忘れはしまいな?

コジンスキイ 貴方がメクレンブルクからおいでになったフォン・ブランド伯爵、僕が貴方の馬丁 — 御安心なさい、大丈夫うまく演ります。

では! (去る)

(フリードリヒ・フォン・シラー、盗賊、第4幕、第1場、関口存男訳)

「大丈夫うまく演ります」という訳文は、*Ich will meine Rolle schon spielen.* の schon の微妙なニュアンスを見事にとらえて、文句のつけようのない名訳である。この翻訳の刊行は昭和の初めだが、訳者がすでに当時からこの schon の本質をこれほどきちんと把握しておられるとは、ただただ驚くほかはない。

(40) Werden wir klares Wetter haben, mein Sohn? fragte der kleine Priester und sah bedenklich nach Neapel hinüber.

Die Sonne ist noch nicht heraus, erwiderte der Bursch. *Mit dem bißchen Nebel wird sie schon fertig werden.*

So fahr zu, daß wir vor der Hitze ankommen.

(Paul Heyse, L'Arrabbiata)

「晴れるだろうかね、アントニーノ？」と小柄な神父は訊いた。そして気遣わしようにナポリの方を見やった。

「陽はまだ出ませんが」と若者は答えた。「これっばかりの霧は、陽が出れば追っ払われてしまいましょう」

「では、急いでやっておくれ、暑くならないうちに向こうへ著けるようにね」

(パウル・ハイゼ、片意地娘、関泰祐訳)

太陽さえ照ればあんな霧などすぐに消えてしまうに違いないという船頭
の確信が、*schon* を通じて神父にはっきり伝わり、それが「では、急いで
やっておくれ」との決心につながるのである。

(41) „Welche Zimmernummer?“

„Das wissen wir noch nicht. Aber wir kriegen's schon raus.“

(Erich Kästner, Emil und die Detektive, 10.Kapitel)

「部屋の番号は？」

「それはまだわからないが、きっとわかるだろう。」

(エーリヒ・ケストナー、エーミールと探偵たち、

第10章、高橋健二訳)

Aber wir kriegen's schon raus. が、「きっとわかるだろう」と訳されているのはまことに物足りない。この *schon* が、へっちゃらさ、ルームナンバーなんてわけなく探り出してみせるさ、という子供らしい自負心のシグナルであることが、この訳文からはまったく読み取れないからである。

(42) Ungeschützt ein feindliches Schußfeld zu durchqueren ist auch in der Dunkelheit eine Wette mit dem Zufall. Man muß sich sagen, „es wird mir schon nichts passieren“, in der Hoffnung, daß der Zufall sich durch solche Beschwörungen beeinflussen läßt. (...)

(Dieter Wellershoff, Der Ernstfall, 7.Kapitel)

味方の援護なしに敵の射程内を横切るのは、たとえ暗闇の中でも偶然

との賭けにひとしい。「大丈夫、何も起こりはしないさ」と祈るしかない。このような念仏を唱えれば、偶然がそれに影響されることを期待しながら。

(ディーター・ヴェラースホフ、いざという場合、第7章)

ここでは、いまさら心配しても始まらないよ、どうなってもかまわないさ、といういささかやけっぱちの気持ちすら schon を通じて伝わってくるのではないだろうか。

次は schon が補足疑問文、厳密に言えば初めから否定の答えを前提とする補足疑問文、つまり修辞疑問的な性格をもつ補足疑問文に用いられる場合である。Was kann schon passieren? (何も起こりっこはないさ)、Wer arbeitet schon gern an Weihnachten? (クリスマスに好きこのんで仕事をするやつなんているものか)、Wen kümmert es schon, ob eine Website in Seattle oder in Stockholm beheimatet ist? (ウェブサイトの場所がシアトルにあるのか、それともストックホルムにあるのか、そのようなことはどうでもいいことだ) のような使い方である。繰り返しになるが、このような否定的な色彩が見られるのは、schon が補足疑問文に用いられるときだけであって、*Nichts kann schon passieren. や *Niemand arbeitet schon gern an Weihnachten. のような使い方はもちろんあり得ない。

(43) Die Mutter nahm seine Hand und legte sie unter der ihren auf die Sessellehne. Endlich sagte sie:

„Was nur mit dem Mädchen los ist. Es macht mir wirklich Sorge.“

„Ach was“, antwortete der Vater ruhig, „was soll schon mit ihr los sein. Sie wird Liebeskummer haben.“

Die Mutter schwieg; nach einer langen Pause sagte sie:

„Ja, das ist gut möglich.“

(Joachim Maass, Die unwiederbringliche Zeit, 3. Teil)

母親は彼 (=父親) の手を取り、その上に自分の手を重ねながら、安楽椅子の肘掛けの上に載せた。最後に彼女は言った。

「あの子、どうしちゃったのかしら。ほんとうに心配だわ」

「いやいや」と父親は穏やかに答えた。「どうってことないさ。たぶん恋の悩みだろうよ」

母親は口をつぐみ、しばらくしてから言った。

「そうね、十分にあり得ることだわね」

(ヨアヒム・マース、二度と戻らぬ時代、第3部)

Was soll *schon* mit ihr los sein. が補足疑問の形をとりながらも、反語として使われていることは、文末に疑問符がついていないことにも示されているのかもしれない。ただし文末の句読点の使い方は、終止符、疑問符、感嘆符など、個々人の好みによってまちまちであるから、その使い分けには深い意味などないと考えるべきだろう。上の文は一応「どうってことないさ」と意識しておいたが、逐語的に訳すとすれば、「彼女の身に何が起きていると、お前は言うのか」ということである。

(44) Bei ihr habe ich Schnaps trinken gelernt. Zuerst tat mir der Cognac weh, und ich bat sie um Likör. „Likör?“ sagte sie, „wer trinkt schon Likör?“ Inzwischen bin ich längst überzeugt, daß sie recht hat: dieser Cognac ist gut.

(Heinrich Böll, Und sagte kein einziges Wort, 6.Kapitel)

彼女のところでほくは強い酒を飲むことを覚えた。最初はコニャックがきつかったのでリキュールを頼んだ。「リキュールなんて飲み物じゃないわ」いまではほくも、彼女に理があることを確信している。とにかくこのコニャックは旨いんだ。

(ハインリヒ・ベル、そして何も言わなかった、第6章)

Wer trinkt *schon* Likör? も同様に反語的な補足疑問文で、直訳すれば、「リキュールなんか誰が飲むものか」、つまりリキュールを飲む人などいない、ということである。

(45) „Bring ihn Elske“, sagte er, „und sag ihr, sie soll pünktlich sein.“

Er gab mir den Brief. Ich steckte ihn gleichgültig in die Hosentasche und ging los.

„Warte einen Moment“, rief Klemens.

Er kam mir hinterher, legte eine Hand auf meine Schulter und sagte: „Du liest den Brief nicht, hast du verstanden?“

„Wen interessiert schon dein Brief!“

„Gut“, erwiderte er, „ich verlasse mich darauf, daß du ihn nicht liest.“

(Christoph Hein, Horns Ende, 8.Kapitel, Thomas)

「これをエルスケに渡すんだ」と彼は言った、「そして時間に遅れるなよって伝えてくれ」

彼はその手紙をほくに渡した。ほくはそれを無造作にズボンのポケットに突っ込み、出発した。

「ちょっと待った」とクレームスが呼び止めた。

彼はほくを追いかけてくると、片手をほくの肩に載せて言った。「おまえ、この手紙を読むんじゃないぞ、判ったな？」

「おまえの手紙なんかに興味はないさ」

「よし」と彼は答えた、「信じよう、おまえが手紙を読まないとな」

(クリストフ・ハイン、ホルンの最後、第8章、トーマス)

従属接続詞 *wenn* に導入される条件文の *schon*、平叙文の *schon*、そして補足疑問文の *schon* が、三者三様にどのような意味のニュアンスを聞き手に伝えることができるかを、具体例を通じて詳しく検討してきたが、「せっかく」「どうせ」「まさか」など一連の日本語の副用語と比べて、心態詞 *schon* の意味内容が、それが使われるそれぞれの文の構造にいかにか大きく依存しているかが、以上の説明である程度お判りいただけたことと思う。平叙文の *schon* と補足疑問文の *schon* とは「せっかく」や「どうせ」とはまったく無関係であり、*schon* の「せっかく」や「どうせ」との関わりは、従属接続詞 *wenn* に導入される条件文のなかでこそ生まれたものだということを、くどいようだが再度確認しておきたい。

VI おわりに

以上の考察からわれわれはどのような結論を導き出せばいいのだろうか。とりあえずはこういうことだと思う。「どうせパリまで来たのだから、

ルーヴルは見とかなくちゃね」と Wenn wir schon in Paris sind, müssen wir den Louvre gesehen haben. の例が示すように、副用語の「どうせ」と心態詞の schon が、日本人やドイツ人によってほぼ同一の場面で好んで使われることは事実であり、この小論執筆の動機もそこにあったのだが、それだからといって両者を類似の語類に属するものと軽々に判断してはならないし、安易にこの両者を対照文法 (kontrastive Grammatik) の研究対象とすべきでもない、そういうことではないだろうか。「どうせ」や「せっかく」を含む副用語と、schon もその一つと一般に考えられている心態詞とは、そもそも比較の対象となり得るような類似の語類ではまったくないからである。例えば日本語の「どうせ」をドイツ語と比較せよというのなら、心態詞ではなく、現在までのところはまだふつうの副詞として扱われている ohnehin、sowieso、あるいは南ドイツやオーストリアの日常語で好んで用いられる eh (Laß doch! Das nützt ja eh nichts. やめとけよ。どうせ何の役にも立ちゃしないさ) などを取り上げるほうがはるかに意味があるだろうし、上記の渡辺氏の本でも副用語の例として取り上げられている「せめて」に対応するドイツ語は何かと問われたら、その〈数量表現〉との関わりの深さから見て誰もが思いつくのは、心態詞ではない wenigstens や mindestens のたぐいだろう。純粹な〈数量表現〉に使われることの多い mindestens はともかく、とりわけ wenigstens は、Du solltest dich wenigstens bei ihm entschuldigen. (きみも せめて 彼に謝るぐらいのことはすべきじゃないかな)、Wenn ich ihr wenigstens etwas Geld leihen könnte! (せめて いくらかでも彼女に金を貸して上げられたらなあ) の訳文でも明らかなように、「せめて」ときわめてよく似た使われ方をするからである。

(2007年8月)

(出典著者一覧表)

Biedenbach, Mieke (生年没年不詳)

Böll, Heinrich (1917-85)

Dörrie, Doris (1955-)

Goethe, Johann Wolfgang von (1749-1832)
Hein, Christiph (1944-)
Heyse, Paul (1830-1914)
Jokostra, Peter (1912-2007)
Kafka, Franz (1883-1924)
Kästner, Erich (1899-1974)
Maass, Joachim (1901-1972)
Moritz, Karl Philipp (1756-1793)
Plenzdorf, Ulrich (1934-2007)
Reich-Ranicki, Marcel (1920-)
Rilke, Rainer Maria (1875-1926)
Sahl, Hans (1902-93)
Schiller, Friedrich von (1759-1805)
Schneider, Peter (1940-)
Schnitzler, Arthur (1862-1931)
Stifter, Adalbert (1805-68)
Suttner, Bertha von (1843-1914)
Wellershoff, Dieter (1925-)

(慶應義塾大学名誉教授)